



武田泰淳全集

第十一卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第十一卷

昭和四十六年十一月二十日 初版第一刷発行
昭和五十三年十二月二十日 増補版第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号 一〇一一九一

電話 東京(29)七六五一(代表)
振替 東京 六一四 一二三

印刷 株式会社 三 松 堂
製本 和田製本工業株式会社

第十一卷 目 次

司馬遷……………3

ユーモア雑誌『論語』について……………121

鍾敬文……………125

中国民間文学研究の現状……………126

新漢学論……………133

今年度の中国文化（国学）……………135

中国西南地方蕃人の文化……………139

『山歌』……………163

河北省実験区「定県」の文化……………165

唐代仏教文学の民衆化について……………169

獠人と鬘型儀礼……………180

疑古派か？ 社会史派か？	182
よろめく「学報」の群	185
昭和十一年における中国文壇の展望	189
影を売った男	198
袁中郎論	200
抗日作家とその作品	208
李健吾の喜劇について	213
戦線より	220
土民の顔	221
戦地より	222
美しき古書	223
臧克家と卞之琳	224
戦線の読書	232
支那文化に関する手紙	238

杭州の春のこと……………	244
同人綴方浜松紀行……………	247
支那で考えたこと……………	248
巴金「旅途通訊」……………	254
沈從文「記丁玲」続集……………	255
梅蘭芳遊美記の馬鹿々々しきこと……………	257
山西開発展を観る……………	262
小田嶽夫「魯迅伝」……………	264
揚子江文学風土記序……………	267
黄鶴楼……………	268
赤　壁……………	280
桃源の娼婦……………	287
苗族のいる町……………	292
若き兵士の旅……………	297

蜀へ入る路……………304

草堂の杜甫……………312

蜀土碧血記……………328

蜀女二題……………335

佐藤春夫「支那雜記」……………345

曹禺「北京人」……………347

南方關係支那文献解説……………348

中国と日本文芸……………356

中国人と日本文芸……………360

中国作家諸氏に……………368

雑誌の精神……………371

竹内好『魯迅』跋……………376

解 説……………山本健吉 379

解

題

.....

389

『司馬遷』語注

.....

401

評

論

1

司馬遷

自序

3 司馬遷

「哲学」そのものであり、支那文学、支那哲学ではなかつた。要するに、私達の求めていたのは「文学」そのもの、あり、私達の精神とは、かなりへだたっている、と思われる。私達は、京都派の支那学についても、ひととおりの関心は持ったけれども、やはり先人の学は先人の学であり、私達の精神とは、かなりへだたっている、と思われる。要するに、私達の求めていたのは「文学」そのもの、

私達は学生時代から、漢学というものには、反感を持っていた。反感を持つと言うより、まるで興味を惹かれなかった。漢学を通じて、支那の文化に接するのが、あきたらしく、感覚的にも厭であつた。漢学の本質を見きわめてではないが、漢文につきまとう雰囲気、漢学にふくまれた儒教臭さが、どうしても、なじめなかつた。日本人として、支那文化を研究する道は、ほかのところにある。それを自ら苦しみ、自ら見出さなければならぬ。そう私達は考え定めていた。私達は、京都派の支那学についても、ひととおりの関心は持ったけれども、やはり先人の学は先人の学であり、私達の精神とは、かなりへだたっている、と思われる。要するに、私達の求めていたのは「文学」そのもの、

たのかも知れぬ。つまらない、つまらない。そうつぶやきながら、支那の書物の頁をめくっていた多くの先輩知己のことを、私は知っている。私達は、昭和九年頃から、中国文学研究会を始め、支那の現代文学や、支那の支那学者の業績などを、しらべることにした。この会へは、日本人も支那人も、いろいろの種類の人物が出入し、さまざまな曲折を経たが、それでも十年近くの間、数人の同人は、この会の奥にとじこもるようにして、ひたすら考えつづけて来た、と言つてよい。外部から批判されるまでもなく、私達は未熟であり無能であつたため、何ら新しい路は見出せなかつたが、同人が互いに自分のなやみを見かわした時、心に通う深い感慨だけは残している。君達は眼先の文化、現代の末梢だけに氣をとられ、支那思想の本流を棄てている。そう言つて、私達に忠告してくれる人もいた。しかし私達は、そういう忠告に対して、ただ悲しげに黙するより術はなかつた。人は何と言つても良かつたのである。私達は、

私達の心を、少しでも満たすものが書きたかったのである。今にいつか、支那古典について、自分の考えをのべることにしよう、とその頃から腹の中では誓い合っていた。私が「史記」について考え始めたのは、昭和十二年、出征してからである。はげしい戦地生活を送るうち、長い年月生きのびた古典の強さが、しみじみと身にしみて来て、漢代歴史の世界が、現代のここのように感じられた。歴史のきびしさ、世界のきびしさ、つまり現実のきびしさを考える場合に、何かよりどころとなり得るものが、「史記」にはある、と思われた。わずかな暇に読みふけるたび、司馬遷の世界構想の、広さ深さに、ますます驚かされた。十四年、帰還してからも、想いつくままに、とりとめもなく、「史記」を題材にしたメモを取ることにした。メモを取るのも面倒な時は、「史記」原本の紙面に、勝手な意見を書きつけたりした。少しずつ書きすすめることにより、私は感じ、かつ考えていた。現実を感じ、現実を考えるように、古典を感じとり、考えぬくことは、おそろしくもあり、楽しくもあった。私は「史記」を、個別的考証の対象としたり、古代史研究の資料として置きたくはなかった。史記的世界を眼前に据え、その世界のざわめきで、私の精神を試みたかったのである。しかし書くそばから考えが変り、三年間、自分の位置を定めることが、出来なかった。昨年十二月八

日まで、その低迷徘徊がつづいていた。この日の半年前に、すでに日本評論社の赤羽氏から、お話があり、文芸評論風にまとめた気持はあったのに、つい筆がしぶっていたのが、あの日以来、心がカラッとして、少し書けそうになった。まずい物でも、ともかく書きましよう、と自分をはげまして、約一年、漸く形をなしたわけである。歴史論とも、思想論ともつかぬ、文芸評論風の風の字つきのものであるが、無力者故、いたし方ない。

昭和十七年十二月

著 者

凡 例

第一篇 司馬遷伝

一、引用漢文は多少意識的な現代語訳とした。

一、司馬遷の年譜には諸家異論多きため巻末に「司馬遷年譜対照表」を附した。

一、「史記」参考書若干については「後記」に於て説明した。

司馬遷は生き恥さらした男である。士人として普通なら生きながらえるはずのない場合に、この男は生き残った。口惜しい、残念至極、情なや、進退谷^{まち}まった、と知りながら、おめおめと生きていた。腐刑と言ひ宮刑と言う、耳にするだにけがらわしい、性格まで変るとされた刑罰を受けた後、日中夜中身にしみるやるせなさを噛みしめるようにして、生き続けたのである。そして執念深く「史記」を書いていた。「史記」を書くのは恥ずかしさを消すためではあるが、書くにつれかえって恥ずかしさは増していったと思われる。

多く名著は苦しみによって生れるが、その苦しみの形が司馬遷のようにはっきりしているのは類がない。生きているのが恥ずかしいという苦しみは、もう致命的で、自分も他人もどうする事も出来ない。このどうする事も出来ない苦しみにとりつかれると、人は時たま徹底的に大きな事を考えたくなるらしい。司馬遷の場合は考えるといっても、書くことであり、書くといっても、「記録」することである。「記録」は書き物の中でも一種特別の形で、しらべ、

書きつけ、書き残すのが本分である。それ故、本式の記録は非常に面倒なものであるが、これをやるには、彼のような状態にある人間が適している。記録というところ簡単に考える人があるが、私は、記録は実におそろしいと思う。

記録が大がかりになれば世界の記録になるし、世界の記録をなすものは自然、世界を見なおし考えなおすことになるからである。これはなかなか出来にくい事で、それ故たとえば司馬遷などが適していると言うのである。また適しているにも、いないにも、そんな大それた事を企む人間は、やたら探しても見つかるものではない。その企みをやる氣持が、人間世界では非常に稀なのである。それ故「氣持」といってもちょっとした気分や感傷ではない。現代風に言えば「思想」となるかも知れぬ。要するにその非常に稀な絶体絶命の氣持を司馬遷が持っていたことは疑いがない。

この氣持は「任安に報ずるの書」に、よくあらわれている。

「任安に報ずるの書」は「太史公自序」と共に、司馬遷伝のための唯一無二の資料である。「漢書」の司馬遷伝も、この二つの資料を並べたものに過ぎぬ。何しろ西紀前のことだから、これだけでも残っているのが驚異的で、文句は言えない。ことに任安宛の手紙は、著書ではない、単なる手紙なのであるから、それが湮滅せずに残ったのは、人間

執念の強さを示すものと思えない。この手紙は漢の武帝、征和二年十一月の末つ方、西曆紀元前九十一年冬に書かれたと推定される。実に古い古い手紙であるが、その手紙にもられた彼の氣持は、実によく現代でも読んでわかるのである。

今の世の中に生きている歴史家が歴史を書き、文学者が文学を書く氣持の方は、中にはまるでわからぬ者が多いのに、漢代人司馬遷の氣持の方がよくわかるというの不思議な話である。まさに死刑にせんとしている獄中の任安に宛て、失意絶望の司馬遷が書いた返事であるから、深刻痛烈で小説より面白いところがある。冬書かれたからではないが、読んでいて寒くなる。まずこの手紙を読んでみよう。

「わが父司馬談、太史公の牛馬走なる司馬遷、再拜して申し上げます。少卿（任安の字）殿からは、先頃御手紙をいただき、人との交際をつつしめ、賢士を推薦することを務めよ、との御教え、ねんごろなおぼしめしと存じますが、貴殿は私が貴殿の忠告を無視し、一般徒輩の言葉と同一視したりするかのごとく想われているようですが、私には、そんな氣持は全く無いのであります。私はつまりらぬ人間ではありませんが、それでも、長者の遺風はほのかに聞き知っ

ております。ただしつらつら考えますに、私は、刑余のはかない身であり、わずかな挙動もとがめられ、益さんと欲して反かえつて損する立場にあります。これがため、ひとり鬱々として、語る相手もなく過いごさねばなりません、諺に、誰がためにこれを為なさん、孰いづれをしてこれを聴かしめん、と申します。鍾子期が死するや、伯牙は終身、琴を弾きませんでした。これぞ、士は己を知る者のために用をなし、女は己を説とぶ者のためによそおいをこらす、と言うものでありましょう。私は、肉体的にすでに片輪であります。たとえ、隋侯の珠、和氏の璧の如き才を懷いだき、許由、伯夷の如き高き行いをなしても、榮譽を得ることは出来ず、かえつて嘲笑を受け自らを辱はずかしめるのが落ちであります。御返事は、もっと早くさしあげるつもりでした。ただし私は、天子の御供で東方へ旅行したり、また私事にとりまぎれ、お目にかかる暇もなく、何かといそがわしきあまり、書面を以て、私の本心を申しのべることも、かないませんでした。ところが今や、少卿殿には、思いもうけぬ罪に問われ、獄にあること数個月、はや罪の判決の下る十二月になろうとしています。私とても、天子に従つて雍ようへおもむかねばなりません。貴殿の上に何時死がおとずれるや、はかりがたき今日、このまま、私の憤懣を知人にうちあけることもせず終れば、この世を去った貴殿の魂魄は、

ながく恨みつきせぬであります。では、私の胸のうち、ひととおり述べさせていただきます。永い間、御返事のおくれた段は、平にお許し下さい。

修身は、智の符であり、施しを好むのは、仁の端であり、取ること与えることは、義の表であり、恥辱は、勇を決するところであり、名を立てるのは、行の極である、と申します。士人たるもの、この五つのほまれあつて、はじめて、世間に出て、君子の林に列することが出来ます。さればこそ、禍は、利慾に目がくらむより、いたましきはなく、悲みは、心を傷ましめるより苦しきはなく、行いは、先祖を辱はずかしめるより、醜みにくきはなく、詬とがは、宮刑より大なるはありませぬ。刑余の人を、何物よりもいやしむのは、遠い古いにしえよりのこと、当世のみにかぎりません。その昔、衛の靈公が、宦者雍渠と同じ車に乗ったばかりに、孔子は衛を去つて、陳に行きました。商鞅が嬖人景監にたよつて、秦王に見えたため、趙良は、よせばよいのにと、寒心しました。趙談が天子と同乗したために、袁絲は顔色を変じて、いさめました、古くから、これを恥としているのです。中等の人物にしてなお、宦豎にかかわる事は、皆気持をそこなうのです。まして慷慨の士が、何とするでしようか。ただいま、朝廷に人材少しといえども、刀鋸を受けた男に、天下の豪俊を、推薦させる必要はありませんまい。

私は、父の業をつぐことにより、天子の御そばに仕えること、すでに二十余年であります。恥ずかしい話ですが、上に對しては、忠をつくし、信をいたし、奇策才力の譽によつて、明主と結びつくこともできず、内に対しては、遺つたるを拾い、闕けたるを補い、賢者を招き、能者を進め、巖穴の土を顯すこともできず、外に対しては、軍旅にしたがつて、攻城野戰、將を斬り、旗を奪る功もたてることができず、下に対しては、日を累ね、勞を積み、尊き官位、厚き奉祿を取つて、親族交遊のほまれをあげることもできません。今まで私はこの四つのもの、一つとして遂げること、かないませんでした。これによつても、無理に調子を合わせ、容れられようとし、善惡をのべたてたところで、役に立たぬことは、わかり切つております。それでも昔は私も、下大夫の列にまじわり、外廷の會議の末席をけがしたこともあります。しかも当時においてすら、判断明確を欠き、思慮充分でなかったのに、ただいま、肉体不具者となり、奴隸の境地に於て、けがれにけがれている際、首をあげ、眉をのびし、おこがましくも、是非を論じたならば、それこそ、朝廷をかるんじ、当代の士をあなどるものではありませんまいか？ ああ、私如き者、何の言うところありますまいぞ。なおかつ、事の本末は、なかなか明かにはしがたいもの。私如き者、何の言うところありますまいぞ。

私は少にして、不羈奔放の行いをなし、長じては、郷里の譽もない身でありながら、父のおかげで、天子にとりたてられ、つたない技で、宮中に出入を許されました。盆を頭に戴いた以上、天を望むことはできません。一時に、二つの事はなし得ないのです。それ故、私は、賓客の交りを絶ち、家室の業を棄て、日夜、不肖の才能を竭そうと、一心に職にはげみ、天子に氣に入られようと努めました。しかし、ああ、物事には、喰いちがいと言うものがあります。しかも、それが大きいのであります。

私は李陵と共に、同一門下には居りましたが、もとからの親友ではありません。行動も各々異つていましたし、盃をあげ、酒を飲んで、友情をあたためたこととて、ありません。しかしながら、私が、彼の人となりを觀察するに、生れつきの奇士でありました。親につかえて孝、士と交つて信、財物に對すること廉、取ること与えることに義、何かにつて人に譲り、恭儉にして、へり下っていました。常々、奮発してわが身をかえりみず、以て國家の急に殉ぜんとした心は、彼の胸中に蓄積されてありました。李陵には國士の風がある、そう私は考えていました。人臣たる者、万死に出でて、一生の計をかえり見ず、公家の難に赴くことは、これだけでも、奇と申さねばなりません。しかるに今、この彼が、事を挙げて、一度失敗したからとて、一身

の安全をはかり、妻子を安泰ならしめている官吏共が、その非を責めて罪におとし入れんとするのは、小生の私情、真に忍びえぬ悲しみであります。

そればかりではありません。李陵は五千に足らぬ歩兵をひきつれ、匈奴戎馬の地深くすすみ、單于の王庭を足にふみ、餌を虎の口に垂れて、あえて強敵胡兵に、戦をいどみ、億万の軍をむかえ打って、單于と連戦すること十余日、敵の死者は味方よりはるかに多く、敵は死者を救い傷者を扶くるいとまもなく、解裘の酋長ども、ことごとく怖れ震えました。そこで彼等は、左右賢王を残らず徴集し、引弓善射の者を総動員し、一国一団となつて、攻撃にかかり、李陵を包囲しました。転戦千里、李陵の軍は、矢尽き道窮りしかも援軍到着せず、士卒の死傷、山の如く積みかさなりました。けれど、李陵が一呼して軍をねぎらうと、士卒一人として、身を起し、涕をふるい、血をぬぐい、涙を飲み、空弓をひきしぼり、自刃を冒し、北にむかつて、争って死なぬものはありませんでした。

李陵が匈奴に降参せぬ頃は、彼から報告の使者があると、漢の公卿王侯、みな觴を奉つて、お祝い申し上げたものです。それから数日たち、李陵敗戦の報が上聞に達すると、天子は、ために食の味を忘れ、政治をとる気もなくなり、大臣は憂懼のあまり、なす術も知りませんでした。

そこで私は、卑賤の身もかえり見ず、天子悲嘆の有様を見かね、ひそかに忠実な意見を開陳せんものと、考えました。李陵は、兵卒達と艱苦を共にし、喜びを分かち合い、よく兵卒達をして死力を尽くさせました。この点、古の名将にも劣りません。身は敗北降参しても、その真意は、まさにそのつぐないを得、漢に報いようとするのでしょう。事ここに到つては、如何ともなしがたいのです。彼の匈奴撃破の功は、大いに天下に示しあらわして、しかるべし。これが私の意見でした。私はこの意見を述べよう述べようと、その路がありませんでした。

ところが、たまたま、天子から召問にあずかったので、以上の意味で、李陵の功績を推重し、天子の心を広め、群臣の眚眚の言葉を、とどめようとしたのですが、言明が不充分で、明天子もついにこれをさとらず、私が、貳師將軍李広利の功を阻み、李陵のために遊説すると、思われ、ついに、私を獄官にわたされました。せつない忠誠も、ついにのべることもなわず、上を誣うるものとして、結局、衆吏の議に従うことになりました。家貧しく、財貨を以て罪を贖うこともできず、交遊も救う者なく、左右親近者も、一言の弁解もしてくれませんでした。私とて、木石ではありません。刑吏どもにかこまれ、深く囹圄のうちに幽閉され、誰に慰えることのできぬ苦しさ、それは、貴殿が、今